

東京学芸大学 ○ 孫 慶美 小澤 紀美子

目的 住生活に“ゆとり”を与えるためには、ある程度の広さが必要であるが、大都市の住宅事情では広さの確保は難しい。しかし洋風化の進行の中でユカ座の起居様式が根強く残っているのは、空間的にゆとり感を得ることができる、くつろぎや安らぎを得ることができる、日本の風土性によるのであろう。本研究では、こうした観点から和室と起居様式に関する意識と実態の調査を行った。

方法 ①調査対象：多摩ニュータウン（多摩市）居住世帯2000世帯（30～55歳の世帯主）②抽出方法：無作為抽出③調査方法：郵送法による質問紙調査法④調査期間平成4年2月上旬⑤回収数：1329票（66.5%）⑥有効回収数：1284票（64.2%）

結果 ①95%以上の住宅で和室をもつ。和室の所有は居住面積の狭いほど多く、和室の多機能性を反映している。②和室をもたない住宅でも「広さが許せば和室必要」「和室は絶対必要」と和室を望んでいる。③記述式調査による和室の使い方は、面積が広く、部屋数の多い住宅では単一的な使い方、逆に狭い住宅では多機能的な使い方を行っている。④和室のない住宅では「心のゆとりや安らぎのための和風感覚」の空間としての使い方を望んでいる。⑤イス座の起居様式は「利用頻度が高い」が、ユカ座は「ゆとり感を与え」「家庭行事を行うのによく」「昼寝・病気になったときによく」さらに「落ち着く」「多目的に使える」起居様式であるので望ましいとしている。⑥住空間へのゆとり感は、100㎡以上の広さが必要である。